

初等教育教員養成課程におけるピアノ初心者の 弾き歌いの指導に関する一考察 —学級における演奏発表に対する意識に着目して—

A Study on Teaching Methods for Beginning Piano Students
in Elementary Education Teacher Training Programs:
Focusing on the awareness of music performance in class

井 上 友里子

Yuriko INOUE

音楽教育研究ユニット

(令和5年9月29日受付, 令和5年12月22日受理)

抄録

本研究では, 本学の初等教育教員養成課程の授業で歌唱教材の弾き歌いの演習課題を課す際, 受講生が学校教育現場で前向きに弾き歌いの技術を活用できるようにするための指導の工夫について考察した。受講生を対象に, 授業での実技試験(演奏発表)の際に他者の演奏を意識的に聴く活動として感想シートを用いた実践を行い, 事後のアンケート調査の記述回答から, 自分自身が演奏する時と他者の演奏を聴く時の意識の違いに焦点を当てて分析した。その結果から, 受講生がピアノ演奏を学校教育現場で生かすために効果的な指導方法について考察した。

はじめに

筆者は, 福岡教育大学において, 小学校教員免許取得のための授業「小専音楽」を担当している。この授業では, 教育現場や教員採用試験での指導や課題演奏等の場面を見据えて, 小学校で歌われる歌唱共通教材の《ふるさと》や《もみじ》を中心に, ピアノを演奏しながら歌えるようになること, いわゆるピアノによる弾き歌い(以下, 弾き歌いとする)の課題を主たる目標として指導を行っている。15回の授業の後の実技試験では, 弾き歌いの実技試験を課しており, その際は他の受講生全員の前で一人ずつ演奏発表させる形で評価を行っている。

コロナ禍以前は, 授業は約60名の集団授業で15回にわたって行われていたが, 新型コロナウイルス(COVID-19)が流行し始めた2020年から1教室の収容人数も制限され, 多人数での授業

を行うことが難しくなり, 対面とオンラインとの併用, また分散登校での短縮授業を行ってきた。このような状況下でも, 弾き歌いの実技試験は感染対策を入念に行いながら対面で行い続けてきた。

受講生のピアノ演奏技術は, 経験によって差が大きく, 多くの受講生が初心者である。一人一人時間をとって個人指導を行うと, 人前での演奏を「不安だ」と思っている気持ちを相談する学生が少なからずいる。また, 初回授業時に実施するアンケートで, 「ピアノ演奏や読譜・音楽の授業づくりに関して悩みがあれば教えてください」という質問に対して, 「人前で演奏したり歌うことにコンプレックスがずっとあって苦手」「弾き歌いに慣れたい」「みんなの前で歌を歌うことが苦手」「音楽経験の無さ」などの回答がしばしば見られる。

将来教師になり教壇に立った時、少しでも自信をもって児童の前でピアノを活用しての指導を可能にするため、人前での演奏に慣れることは必要不可欠である。また、そのためにも、受講生が人前での演奏についてどのように感じ、何に抵抗を感じており、どのように支援することが有効かを調査・研究することが、受講生の演奏発表への不安の軽減や、将来をイメージした技術習得に役立つのではないかと考える。

本研究では、受講生を対象に、これまでの人前での演奏経験についてアンケート調査を実施した。また、授業での実技試験（演奏発表）の際に他者の演奏を意識的に聴く活動として感想シートを用いた実践を行い、学生の意識を事後のアンケート調査から分析した。その結果から、受講生がピアノ演奏を学校教育現場で生かすために効果的な指導方法について、以下の手順で考察した。

1. 授業の実際には、受講生の未経験者の数や苦手意識、人前での演奏発表経験等について調査を行った。
2. 学習意欲と学級雰囲気では、演奏発表における学級雰囲気が発表者の意欲や自信に影響する可能性と、その重要性について述べた。
3. 他者の演奏を聴く活動を用いた実践と分析では、実技試験（演奏発表）時に他者の演奏を聴く活動を行い、学生の意識をアンケート調査の記述内容から分析し、考察した。

1. 授業と受講生の実際

本節では「小専音楽」の授業の実際と、受講生のこれまでの経験についての調査結果について論述していく。「小専音楽」の授業は各クラスそれぞれ約 55～60 名ずつの受講生がおり、コロナ対策をきっかけに授業を前半と後半に分け、30 名以下になるように分散して受講させている。本研究で被験者となったのは、2022 年度後期に受講した 2 クラスと 2023 年度前期に受講した 1 クラスである。

全 15 回の授業では、最初の 7 回をオンラインで音楽理論の指導を、第 8 回～11 回目の授業を対面の全体指導で電子キーボードを用いた実技演習を、12～15 回目は全体指導と個人指導を組み合わせ指導を行った。対面での授業は、新型コロナウイルス感染対策のため、1 クラスを 2 つのグループに分け、分散登校で約 30 名ずつ各回 45 分間とした。また、第 9 回・第 10 回の授業では、試験課題曲だけでなく《故郷の人々》《もみじ》等の楽曲や、ICT を用いたコード伴奏や伴奏ア

レンジの演習も行っている。

12～15 回目の授業で行う個人指導は、一人 1 回のみで、習熟度に応じて 3 分～8 分程度と短時間しか配分できない。限られた時間の指導環境においては、受講生のピアノ演奏技術を効率良く向上させ、人前での弾き歌いを可能にする必要がある。

冒頭で述べたように、授業の受講生のうちピアノ未経験者は半数を上回る。ピアノの経験年数に関するアンケート回答結果では、未経験の人数は回答のあった 129 名のうち 82 名 (63.6%) であった。ピアノの経験がある受講生の経験年数は、1～3 年が 10 名 (7.8%)、4～6 年が 13 名 (10.1%)、7～10 年が 15 名 (11.6%)、11～15 年が 7 名 (5.4%)、16 年以上が 2 名 (1.6%) である。

また、受講生の小学校から高等学校の間の授業における歌唱テスト時の人前での演奏発表経験についても調査を行った（図 1）。この質問は複数回答できるように設定したものである。回答結果から、小学校の時に機会があったと回答した人数が 71 名 (55%)、中学校が 60 名 (46.5%)、高等学校が 24 名 (18.6%) であった。また、一度も全員の前で発表をしたことがないと回答した人数は 33 名 (25.6%) であり、全体の約 4 分の 1 の受講生が授業において集団の前で演奏を発表した経験が無いということが分かった。

今まで自分が受けてきた学校教育の中で、歌唱のテスト...た機会について教えてください。（複数回答可）
129 件の回答

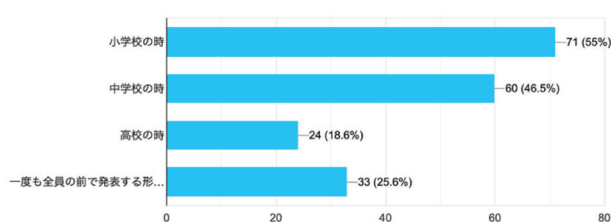


図 1：受講生の小学校から高等学校までの期間における授業での演奏発表経験についての調査

質問：今まで自分が受けてきた学校教育の中で、歌唱のテストは全員の前で発表する形式でしたか？クラス等の大人数の前で発表した機会について教えてください。（複数回答可）

2. 学習意欲と学級雰囲気

鹿毛（2013）は、学習意欲は、個人内の要因だけではなく、「場と個人の相互作用」によって立ち表れるダイナミックな心理現象であるためであ

ると述べた。¹⁾ 演奏の発表は、個人での演奏かグループでの演奏かに関わらず、演奏者だけではなくその場に聴き手が存在すれば「場と個人の相互作用」が起こり得ると考えられる。野原 (2018) らの学級雰囲気と本来感と学習意欲の関係性についての研究では、小学校高学年の児童を対象とした質問紙調査の分析結果から、学級雰囲気得点が高いほど本来感得点も学習意欲得点も高くなることが認められた。²⁾ また、学級雰囲気が児童らの学習意欲に大きな影響を与えていることが確認できたことから、野原らは「学級雰囲気のよい学級を作っていくことが学習意欲と本来感の向上に関わってくると考えられる。」と述べた。³⁾ 学級雰囲気を高めるために「楽しさ」に目が行きがちだが、野原らの研究では、「楽しさ」は、本来感と学習意欲因子との間に弱い正の相関しか認められず、それよりも学級雰囲気因子における「認め合い」「規律」、そして「対等」が本来感と学習意欲との間に中程度の相関が存在していた。このことから深見らは、学級の「規律」を保ちつつ、児童間の「認め合い」と「対等」を保障することがより重要となるだろうと考察した。⁴⁾ 高井 (2016) は、「教師や学級の仲間から受容されたり共感されたりすることで、安心して自分の思いや考えを表現することができ、自信を持つことができる」⁵⁾ としている。先行研究により、学級雰囲気は児童・生徒の学習意欲や本来感に影響する可能性が高いと考えられるが、直接的に音楽科授業における演奏発表に関して実証している先行研究は管見の限りでは認められない。しかし、学級等の集団の雰囲気は発表者の本来感や意欲にも影響すると考えられる。受講生にとって、小専音楽の授業において集団の前で発表した際の経験が良いものとなれば、教員になった時に児童の前で演奏する自信に繋がるのみならず、児童が演奏の発表を行う際の学級の雰囲気づくりや留意点について学ぶことにも繋がると筆者は考える。次節では、受講生間の「認め合い」を促進する目的を兼ねて、他者の演奏を聴く活動としてプリントを用いた実践をし、自分の演奏が評価されることだけでなく、周りの受講生の演奏を意識的に聴くことの、集団の雰囲気や発表者の心理への影響について考察する。また、授業後に実施したアンケート調査の自由記述内容から、受講生自身が演奏発表をした感想と他の受講生の演奏を聴いた感想について分析を行い、人前で演奏する時の受講生の心理や、演奏を聴くことが受講生の意識にもたらす影響について検証する。

3. 他者の演奏を聴く活動を用いた実践と分析

3.1. 用いた教材と検証方法

はじめに述べたように、筆者が担当する「小専音楽」では15回の授業の後に弾き歌いの実技試験を課しており、その際は他の受講生全員の前で一人ずつ演奏発表させる形で評価を行っている。自分の演奏発表だけでなく他者の演奏を聴くことにも受講生の意識を向けさせるため、図2のプリントを用いた活動を行った。また、このプリントの記述内容は、学期末の成績評価に関わらないものとして取り扱った。次項では、授業後に実施したアンケート調査の自由記述内容から、受講生自身が演奏発表をした感想と他の受講生の演奏を聴いた感想についてテキストマイニングによる分析を行い、人前で演奏する時の受講生の心理や、演奏を聴くことが受講生の意識にもたらす影響について検証する。

♪小専音楽 学習プリント♪

学籍番号 ()
名前 ()

1. 今日の試験の演奏で、心に残った仲間の演奏について記入しましょう。

① () さん

理由

② () さん

理由

③ () さん

理由

2. 小専音楽の授業の感想を聞かせてください。

例) 身についた事、楽しかった事、わかりにくかった事、もっと学びたかったこと等



図2：他者の演奏を聴く活動に用いたプリント

3.2. アンケート回答の分析

今回の調査対象者のうち、2023年度前期に受講したクラス54名に実施したアンケート調査の自由記述の内容から、受講生自身が実技試験で演

奏発表をした感想と他の受講生の演奏を聴いた感想についてテキストマイニングによる分析を行い、人前で演奏する時の受講生の心理や演奏を聴くことが受講生の意識にもたらす影響について検証する。

アンケートの質問項目のうち、①「他の受講生の前で、試験のため準備してきた曲を発表した感想を述べて下さい。」②「他の受講生の演奏を聴くことに関して、感想を述べて下さい。」という二つの質問に対する自由記述の内容について、テキストマイニングによってそれぞれ分析し、また比較して分析を行った。

品詞	単語	出現回数
名詞	緊張	39
名詞	練習	21
名詞	演奏	16
名詞	発表	10
名詞	最後	9
名詞	声	9
名詞	本番	8
名詞	自信	8
動詞	できる	34
動詞	弾く	23
動詞	思う	16
動詞	歌う	15
動詞	しまう	15
動詞	感じる	12

表 1：質問①の頻出語

品詞	単語	出現回数
名詞	演奏	24
名詞	表現	13
名詞	それぞれ	13
名詞	曲	8
動詞	感じる	18
動詞	思う	17
動詞	できる	16
動詞	聴く・聞く	15
動詞	違う	11
形容詞	良い・いい	17
形容詞	楽しい	9

表 2：質問②の頻出語

まず、ユーザーローカル AI テキストマイニング⁶⁾を使ったそれぞれの質問項目による語の抽出と頻出語の分析結果を比較した。表 1 と表 2 は、①と②の頻出語をまとめたものである。

また、図 3・4 は①と②をワードクラウドで表したものである。このワードクラウドでは、スコアが高い単語が複数選出され、その値に応じた大きさで図示されている。単語の色は品詞の種類で異なっており、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞を表している。今後、質問項目は①を「自分が演奏発表をした感想」、②を「他者の演奏発表を聴いた感想」とする。

質問①「自分が演奏発表をした感想」においては、特に「緊張」という言葉が多く用いられ、出現回数が 39 回と最多である（表 1・図 3）。他の頻出語である「練習」「自信」「できる」「しまう」などの言葉から、自分が練習してきた内容通り人前で演奏できるかどうかへ意識が向いていることがわかる。質問①では、ピアノの弾き歌いの発表に対して「演奏」という言葉より「弾く」という言葉が多く用いられていたのに対し、質問②「他者の演奏発表を聴いた感想」では「弾く」という言葉はほとんど現れず、「演奏」という表現が多

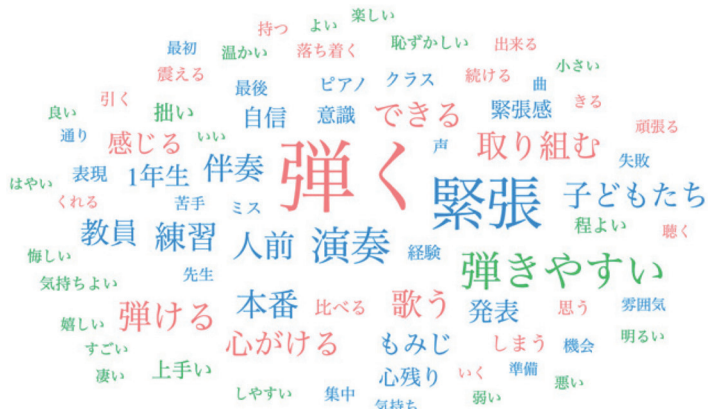


図 3：質問①のワードクラウド

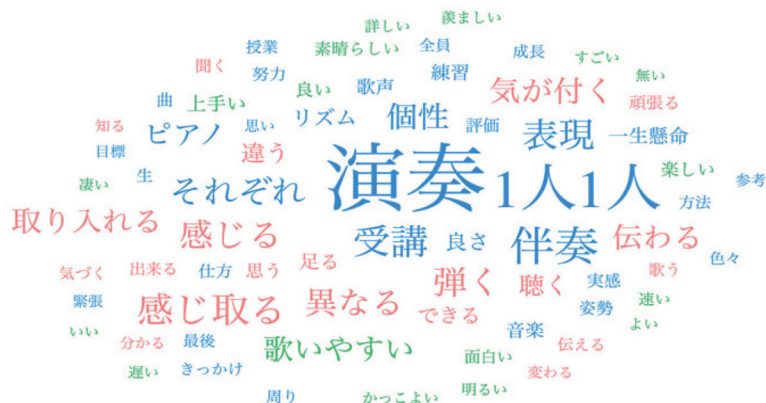


図 4：質問②のワードクラウド

く用いられた（表2・図4）。質問の仕方に起因する可能性も考えられるが、受講生が自分が演奏発表を行う時に比べて、他者の演奏発表を聴く時の方が、「上手く弾けるか」という観点だけでなく、音を出す時の意志や意図など、演奏表現に意識を向けて聴いていることに起因する可能性が考えられる。

図5は、質問①と②に出現する単語をどちらに偏って出現しているかでグループ分けし、図にしたものである。また、表3はその偏りの割合を示したものである。グループ中の単語は出現頻度が多い順に並ぶ傾向にある。①でよく出た単語は「緊張」「弾く」「上手い」「すごい」「歌う」「しまう」「発表」「意識」「弾ける」など、成果に関わる単語が多い（図5）。それに対し、②では「演

奏」「感じる」「楽しい」「表現」「違う」「聴く」「頑張る」「曲」「聞く」「伴奏」「音楽」「全員」「成長」「伝える」「考える」など、成果に関わる単語より、それぞれの成長や音楽性に関する内容が多く用いられた（図5）。また、①だけに出現した単語には「恥ずかしい」「悪い」「本番」「失敗」「自信」「しやすい」などの自分自身の評価や成果に関する感情が見られる単語があり、また、「温かい」「人前」「経験」などの周りの受講生に聴かれる状況を表す単語、「1年生」「続ける」などのこれまでを振り返ったり今後を表す言葉があった（図5・表3）。それに対し、②だけに出現した単語には「それぞれ」「面白い」「伝わる」「素晴らしい」「仕方」「個性」「良さ」「周り」「分かる」「変わる」「気づく」「異なる」「知る」「実感」「方

①自分が発表をした感想にだけ出現	①自分が発表をした感想によく出る	両方によく出る	②他者の演奏を聴いた感想によく出る	②他者の演奏を聴いた感想にだけ出現
嬉しい 弾きやすい 恥ずかしい 悪い 本番 自信 しやすい はやい 大きい 小さい 弱い 悔しい 拙い 気持ちよい 温かい 程よい 人前 経験 引く 最初 続ける 落ち着く 1年生 失敗 教員 通り 集中 きる すぎる 出せる	上手い すごい 緊張 弾く 歌う しまう 凄い 声 発表 くれる 先生 意識 弾ける 持つ クラス	できる 良い よい いい 練習 最後 いく 明るい 無い 機会 苦手 取り組む 比べる 楽しむ	思う 演奏 感じる 楽しい 表現 違う 聴く 頑張る 曲 出来る ピアノ 聞く 伴奏 音楽 全員 受講 生 成長 授業 つける 伝える 考える 見る	それぞれ 面白い 伝わる 素晴らしい 仕方 個性 良さ 周り 分かる 変わる 気づく 異なる 知る 実感 方法 歌声 評価 取り入れる 感じ取る 気が付く 繋がる 見える 見つける 足る かつこよい 歌いやすい 羨ましい 詳しい 速い 遅い

図5：単語の分類

■ 名詞			■ 動詞			■ 形容詞		
①自分が発表をした感想	単語	②他者の演奏を聴いた感想	①自分が発表をした感想	単語	②他者の演奏を聴いた感想	①自分が発表をした感想	単語	②他者の演奏を聴いた感想
29	演奏	71	52	できる	48	45	良い	55
0	それぞれ	100	33	思う	67	68	上手い	32
92	緊張	8	26	感じる	74	100	嬉しい	0
64	練習	36	66	弾く	34	28	楽しい	72
15	表現	85	0	伝わる	100	75	すごい	25
0	仕方	100	4	違う	96	64	よい	36
0	個性	100	72	歌う	28	0	面白い	100
0	良さ	100	15	聴く	85	37	いい	63
48	最後	52	27	頑張る	73	100	弾きやすい	0
23	曲	77	88	しまう	12	100	恥ずかしい	0
100	本番	0	20	出来る	80	100	悪い	0
100	自信	0	15	聞く	85	0	素晴らしい	100
26	ピアノ	74	0	分かる	100	78	凄い	22
0	周り	100	0	変わる	100	100	しやすい	0
73	声	27	0	気づく	100	100	はやい	0

表3：単語の出現回数の割合

法」「歌声」「取り入れる」「感じ取る」「気が付く」「繋がる」「見つける」「かっこいい」「羨ましい」など、他者の演奏を評価する単語や、自分がどう感じ取ったかを表す単語が並ぶ(図5・表3)。また、表3からは、「表現」という単語が用いられる割合が、①が15%に対して②が85%と多いことがわかる。②の記述の内、「表現」という単語は13回と頻出していた(表2)。また、「感じる」も同様で、①の26%に対して、②が74%と高い割合を占めている(表3)。②で「感じる」が出現した回数は、18回と動詞の中で最も多かった(表2)。このことから、上述したように受講生が自分が演奏発表を行う時に比べ、他者の演奏発表を聴いている時の方が、技術面だけでなく、表現しようとする気持ちに意識を向けて音楽を捉えることができていると考えられる。

この単語の分類から、自分の演奏は「上手く演奏できたか」によって評価している傾向が見られるのに対し、他者の演奏の内容を評価する際には、「上手く演奏できたか」ではなく、受講生一人一人が表現したい内容やその違い、練習の過程や成長などに焦点を当てて評価する受講生が多い傾向があることがわかる。①の記述の例では、「人前で弾くことに慣れていなかったのも、すごく緊張したが、止まる事なく弾き終えることができたのは良かったと感じる。」「練習では上手くいき、本番できちんと弾けるかどうか心配だったが、自分の中ではミスすることなく最後まで引くことができてよかった。」「緊張をしまい、違う音で弾いてしまったり、弾くことに意識を向けすぎて声が小さくなったりしてしまった。思い通りにできなくて、すごく悔しかったです。」「緊張をしまい、練習通りには演奏できなかったため悔いが残るが、努力して最後までやり切ったことに意味があるのかなと思う。」などが挙げられる。②のコメントの例では、「みんなの一生懸命さが伝わってきてミスなど関係なく応援したくなった。」「みんなの努力が伝わってきた。成長することの素晴らしさを感じた」「それぞれ上手い下手関係なく、みんな凄く伝えたいことが伝わってきた」「自分と同じく緊張で思うように弾けていない人がいたが、その頑張りや練習などの過程を考え、評価できることに繋がると感じた。最後のワークシートはとても良いと思う。」「(省略) また、ピアノが苦手な人や歌うことが苦手な人もいたと思うが、みんなが一生懸命最後まで弾こうとする姿勢が素晴らしかった。」「ピアノを習っていても、人のピアノに興味を持って聞いたことがな

かったのも、今まで気が付かなかったけど、同じ曲でも弾く人が違うと全然違うということに気が付きました。上手い下手ではなくて、その人が気を付けていることとか表現したいこととかたくさんのことが伝わってくるんだなと思いました。」などが挙げられる。

さらに、他者の演奏を聴く活動によって、自分の演奏発表に影響があったことがわかる記述も見られた。①の記述のうち、「最初はとても緊張しており、いつも通り弾けるか不安だったが、クラスのみんなの演奏を聴いて、自信を持って演奏しようという気持ちになった。本番では少しミスをしたところもあったが、後悔なく演奏できてよかったと感じている。」「とても緊張しました。(省略) また、クラスの雰囲気が温かく、リラックスして演奏できました。他人と比べて上手い下手ではなく、伝えよう・楽しもうという気持ちで演奏しました。」「同じ曲でもひとりひとりの個性によって、違う捉え方ができることを実感しました。みんなが頑張っているから私も頑張ろうという気持ちになりました。」などの記述からは、他の受講生の演奏や、2節で述べたように学級の雰囲気が演奏する際の心境に影響していることがうかがえる。図6は、①の記述の文章中に出現する単語の出現パターンが似たものを線で結んだ共起ネットワークの図である。出現数が多い語ほど大きく、また、共起の程度が強いほど太い線で描画

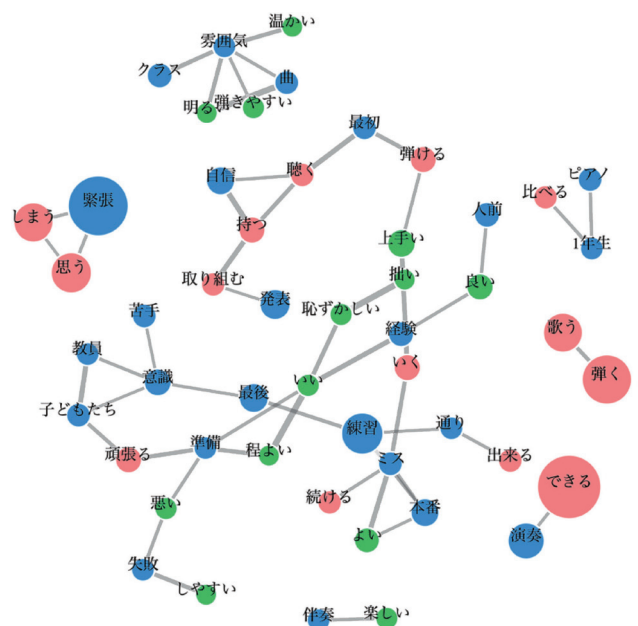
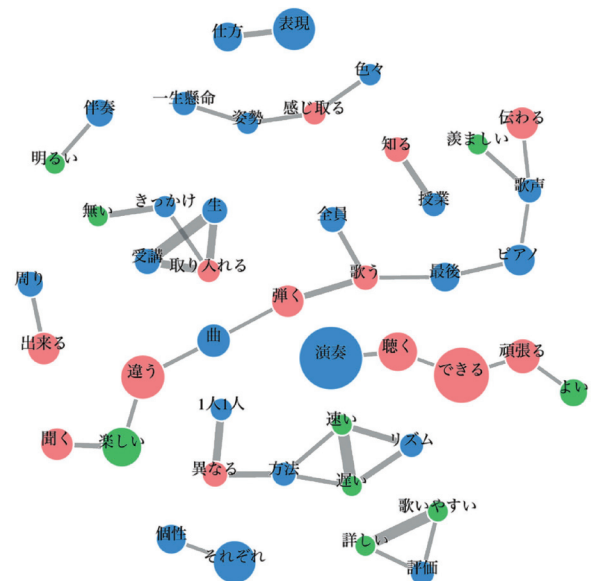


図6：①の記述の文章中に出現する単語の出現パターンが似たものを線で結んだ共起ネットワーク

個性があって、聞いていて新たな発見や面白さを感じることができて楽しかったし、こうしたら良いのかという学びにもなりました。」などの記述からは、他の受講生の表現の違いや良さの発見を自分の演奏を向上させる手立てとしようとしていることがわかる。図7は②の記述の文章中に出現する単語の出現パターンが似たものを線で結んだ共起ネットワークである。



記述の例に見られるように、「表現」と「仕方」、「個性」と「それぞれ」などの単語が共起している他に「演奏」という単語に①では「できる」だけが共起していたのに比べ、②では「聴く」「できる」「頑張る」「良い」など複数の単語がが連なっている。

ここで留意すべきなのは、「違う」「異なる」「それぞれ」の単語が、マップの右下に位置していることである。これらの単語は、実際に記述を読むとポジティブな内容であるのにも関わらず、AIによる分類ではネガティブな単語として分類されてしまっている。特に、他者との違いに関する記述は、単語だけでなく文章全体を読むと全て

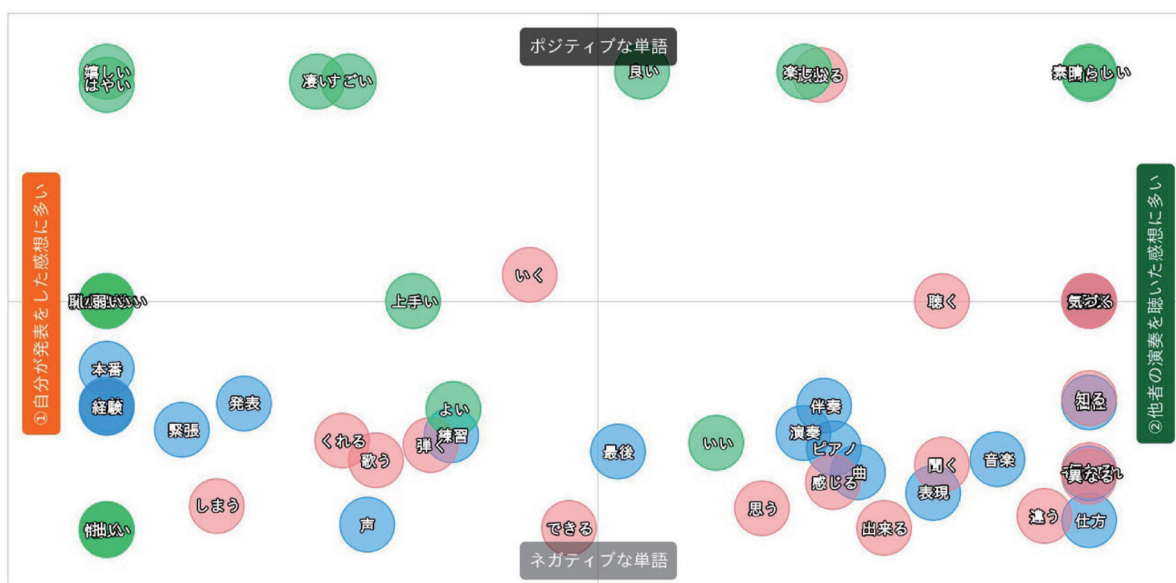


図 8：2次元マッピング

前向きな内容であった。この点に留意し、記述内容ひとつひとつの分類と確認はAIに頼らず筆者自身で行った。図9～10は①と②のAIによるそれぞれの文章全体の感情の傾向の分析を可視化したものである。図9と10では、文章に含まれるポジティブな感情の単語とネガティブな感情の単語の存在比が示されており、「感情」は、文章に含まれる各感情の度合いが数値に換算されている。なお、各感情の数値は、全ての感情の平均値を50%とした偏差値である。①はネガティブの方がポジティブより大きな割合で現れている（図9）。②は①と反対にポジティブの割合の方が大きい（図10）。さらに、上述した通り、AIによる分類で「違い」「異なる」「それぞれ」の単語がネガティブなものとして分類されているため、実際はよりポジティブの割合が高いことが考えられる。このことから、受講生は自分自身の演奏発表の捉え方に比べ、他者の演奏発表を聴く時の方がポジティブな感情をもっていることがうかがえる。

以上のアンケートの記述内容の分析から、受講生は自分の演奏に臨む際に緊張し、「上手くいったかどうか」を重視して自身の演奏を振り返る傾向にあることがわかった。また、それに対し、他者の演奏を聴く場合では、受講生の多くが自然と音楽を「上手・下手」以外の成長の度合いや表現力などの観点で評価していたことが明らかとなった。この結果から、他者の演奏を聴くことを通して、他者の表現の違いを理解することができ、それが自分の演奏発表に良い影響を与えると考察する。

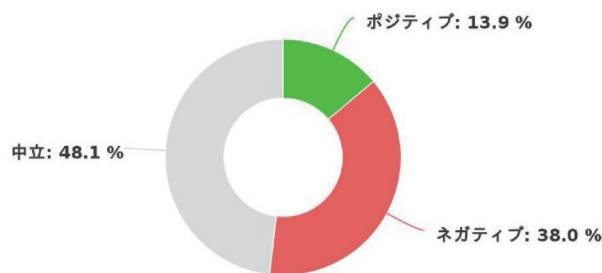


図 9：①の感情分析のサマリー

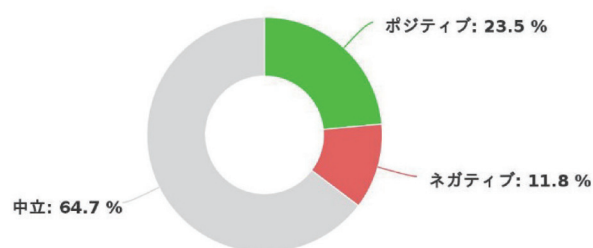


図 10：②の感情分析のサマリー

また、このことは学級の雰囲気と相互に関わり合っていると考えられる。良い学級の雰囲気は演奏する際の心境に良い形で影響し、また、他者の演奏発表を聴くという活動によって学級の雰囲気が良くなるということが分析結果から考察できる。

図11は「実際に他の受講生の前で試験を行ってみて、いかがでしたか。」という質問に対する回答である。52名の回答者のうち、「やってみ

実際に他の受講生の前で試験を行ってみて、いかがでしたか。
52 件の回答

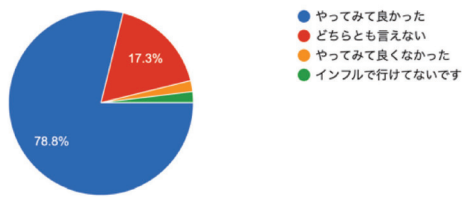


図 11：「実際に他の受講生の前で試験を行ってみて、いかがでしたか。」という質問に対する回答

て良かった」と回答した人数が 41 名 (78.8%)、どちらとも言えない」と回答した人数が 9 名 (17.3%)、「やってみて良くなかった」と回答した人数が 1 名 (1.9%)、その他 (欠席) が 1 名 (1.9%) であった。

今後、他者の集団の前での演奏発表を「やってみて良かった」と感じることができる受講生の割合を増やすために、他の人の演奏発表を聴く時の視点をもたせることがが役に立つと筆者は考える。今回の分析で明らかになった、受講生が自分の演奏を評価する時に比べ、他者の演奏を聴く時のほうがポジティブに捉えている傾向があるということは、他者の演奏発表を聴く活動を行う時に、自分の演奏も他者の演奏を聴く時のように「上手い・下手」に限らない評価を客観的にできるような声かけを工夫していくことが有効な手立てとなる可能性を示唆している。

今回の調査の対象は教育学部で学ぶ大学生であったため、本節で分析した自由記述の回答の中には、「みんなそれぞれの個性が詰まった伴奏を聞いた中で私は、声をはっきりしていて、明るい伴奏にとっても魅力を感じました。私も、子どもたちの楽しいという思いをひきだせる伴奏ができるようになりたいです。」というように、教員になった時のイメージに結びつけて記述しているものが見られた。①でも、「人前で何かを発表するという機会はなかなかないのでとても緊張した。しかし、教師になったら毎日人前に立つことになるのでとても良い経験になった。」「本番に弱い自分にとっては苦であると感じたが、将来子ども達の前で演奏することを想定すると必要な事だと思った。」「最初から最後まで緊張しましたが、みんなに向けて弾き語ろうとする意識ができて教員の練習としてはすごくためになりました。」など、緊張しながらも教壇に立つことを想定して考えを述べている回答が多く見られた。今後も受講生が

小専音楽の授業における学級集団の前での演奏発表の経験を通して、他者の演奏を聴く時のように自分と他者の表現の違いを味わい、その豊かさに気づき、自己の成長に意識を向けることができるよう声かけを工夫していきたい。

おわりに

本研究では、本学の初等教育教員養成課程の授業で歌唱教材の弾き歌いの演習課題を課す際、受講生が学校教育現場で前向きに弾き歌いの技術を活用できるようにするための指導の工夫について、次のような手順で考察した。

1. 授業の実際には、受講生の未経験者の数や苦手意識、人前での演奏発表経験等について調査を行った。

2. 学習意欲と学級雰囲気では、演奏発表における学級雰囲気が発表者の意欲や自信に影響する可能性と、その重要性について述べた。

3. 他者の演奏を聴く活動を用いた実践と分析では、実技試験 (演奏発表) 時に他者の演奏を聴く活動を行い、学生の意識をアンケート調査の記述内容から分析し、考察した。

「自分が演奏発表をした感想」と「他者の演奏発表を聴いた感想」の 2 種類のアンケートの質問に対する自由記述の内容を、テキストマイニングにより分析した結果、受講生は自分の演奏に臨む際に緊張し、「上手くいったかどうか」を重視して自分の演奏を振り返る傾向にあることがわかった。それに対し、他者の演奏を聴く場合には、受講生の多くが「上手・下手」よりも、他者の成長や演奏表現に意識を向けて評価する傾向があることが明らかとなった。また、「自分が演奏発表をした感想」の記述内容に比べて、「他者の演奏発表を聴いた感想」の記述内容の方がポジティブな単語の割合が多い結果であった。

記述内容の分析結果から、他者の演奏を聴くことを通して表現の違いを理解することができ、さらにそれが自分の演奏発表に良い影響を与えると考察する。このことは学級の雰囲気と相互に関わり合っていると考えられる。良い学級の雰囲気は演奏発表者の心理に影響し、他者の演奏発表を聴くという活動によって認め合うことで学級の雰囲気が良くなるということが分析結果から考察できる。「自分が演奏発表をした感想」を述べる際、受講生は練習どおりに上手く弾けたかどうかを評価する傾向があるが、他者の演奏を聴く活動を通して、自分の演奏も他者の演奏を聴く時のように「上手い・下手」に限らない評価をできるような

声かけを教員が工夫していくことが、受講生の人前での演奏に対する前向きな姿勢に繋げる有効な手立てとなる可能性を示唆している。

本論文では、実際の小学校教育現場における試験や評価の際の演奏発表の在り方や、それに対する児童の意識について究明できていない。本研究を生かして、小学校教育現場で行われている演奏発表等の実践についてさらに研究に努めるとともに、今後、演奏発表の在り方が児童の他者理解力や違いを認め合う学級雰囲気にとどのような効果をもたらすか、実際の小学校教育現場での演奏発表の形態における近年の傾向が、コロナ禍を経て児童にとどのような影響を与えているか、などの点についても明らかにしていきたい。

注

- 1) 鹿毛 雅治 (2013)『学習意欲の理論 動機づけの教育心理学』金子書房 p.32
- 2) 野原 万智子, 深見 俊崇 (2018)「学級雰囲気と本来感と学習意欲の関係性の検討」『島根大学教育臨床総合研究 2018 Vol. 17』(島根大学教育学部附属教育支援センター紀要) 第1号 p.82
- 3) 同上書 pp.84-85
- 4) 同上書 p.85
- 5) 高井美智代 (2016)「居心地のよい学級づくりのための授業における生徒指導の工夫—児童の「楽しい・できる」「受け入れられた」「決めた・言えた」を促す授業支援シート「T-k nack シート」の作成を通して—」『群馬県総合教育センター長期研修員研究報告書』252集, pp.1-11
- 6) ユーザーローカル AI テキストマイニングツールで調査を行った。<https://textmining.userlocal.jp>